
カラーシーズン

傘男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラーシーズン

【Nコード】

N9114R

【作者名】

傘男

【あらすじ】

マツドはまだ子供、だけど人よりたくさんの事を知っていて、たくさんの人より強力な力を持っていて、たくさんの人よりずっと過酷な運命を背負っている。
数奇で変わり者なSFファンタジー

1 プロローグ

ツンツンしたくせつ毛の少年マッドの本名は真人^{マサト}、小柄で茶髪の少年シユルの本名は修司^{シュウジ}。

二人は同じ中学に通う親友同士、マッドとシユルはあだ名、そしてこれは誰も知らず、だけど誰もが知る世界の物語。

カモミールフレイバー町という名前の町は日本にはない。しかし間違いなく日本のどこかに暮らすシユルは自分の生まれ育った町をそんな名前で呼んでいる。それは町の本当の名前は知らないシユルが勝手に名付けた名前である。今では世界全体から見ればかなり一部ではあるが、すっかり浸透していて、親友のマッドだけでなく、彼らの周りの者達のほとんどがその町の事をそう呼んでいる。そしてシユルはそのカモミールフレイバー町とある空き家に来ていた。正確には空き家ではないのだが、近所にはそのように伝わっている家。

「シユルか、何か用か？」

シユルが家の中に足を踏み入れた瞬間に、彼にかけられた家主の声。ずっと部屋の隅で、まるで幽霊のように三角座りで俯いている長い白髪の青年。

「うん、ちょっと忠告をね、ホワイト」

ホワイトは白髪男の本名ではなく、例によってシユルのつけたあだ名である。自分のそれこそマッドがつけた物であるが、マッドの名付け親もシユルである。つまりシユルは人の本名を覚えず勝手にあだ名をつける迷惑少年なのである。本名を覚え不了的には拘りすら持っている、とんだ勝手野郎なのだ。

「実はこの家を取り壊されるって話が近所で持ち上がってるらしい、だからいい加減存在証明くらいしないと言って言いに来た訳」

「なんだってえ、ちょっと待って、だが一体、しかしこの家が空き

家じゃないとわかれば俺は」

そこで言葉と供に体もピタリと停止するホワイト。

「ホワイト？」

言いながら停止する目の前の男に手を振って見るシユル。

「別に問題はないな」

「まあそうだろうね」

頷き合う二人。

「ところで今日はマッドは一緒じゃないんだな？」

ふと疑問を抱くホワイト。外では大体二人はいつも一緒に行動している。

「ああ、あいつはデート」

「デート？まだ中学生のくせにずいぶんと羨ましい奴だな、まったく」

「あはは」

「くくく」

また笑い合う二人。

彼の周りでも少数の人しか知らないマッドの秘密。マッドの正体。マッドの数奇な運命。シユルもホワイトも大層な秘密を隠しているのだが、二人合わせてもマッドには負ける事だろう。

そしてそのマッドはその頃ある乗り物に乗っていた。日本のどこかを走っているはずの何もかもが真っ黒な電車、その第三車両で彼は金髪ポニーテールにくるぶちメガネをかけた五歳ほど年上の少女とチェスを打っていた。

ただしこれがデートなら、デートとはなんと危険な物であろうか？当事者であるマッドにはとても笑えない話である。

1 プロローグ（後書き）

これ中学の頃に書いた話（シリーズ物の第二までしか書いてない）を大幅修正（というより再構築）した作品です。

何にでも横文字のあだ名がついてる話ですが、当時僕の周りで流行ってた遊び（？）です

2 プロローグ？

「ん〜、ん〜」

「ほんつとつに心の底から頼む、さつさと打ってくれ」

もうすでに五分ほど考え込んでいる対戦相手にいらいら声で頭を下げるマッド。ある理由から彼はとにかく焦っていた。

「ん〜、と、よしわかったわ、これ」

そしてようやく次の手を打ち自分の番を終えるのん気な少女ゲーガール、もちろんただのあだ名である。つまりマッドだけでなく彼女はシユルとも知り合いなのである。

「じゃあこつ」

あまりに長いゲーガールの思考中に自分の手も考えていたので、マッドの番は一瞬だった。

「ふふ、そう来たね、じゃあこつよ」

「なら」

今度はわりと早いゲーガール、そしてマッドはそれよりさらに早かった。

「チェックメイト」

そしてゲームはマッドの勝利で幕を閉じた。

「あああ」

まるでこの世の終わりが来たかのような断末魔を上げるゲーガール。

「さあ約束通りチェスしたんだから例の物を」

「ちえつ」

そして渡されるとある映画のDVD。実はチェスを打つというのはこれを借りる交換条件だったのである。

「また負けた、なんで勝てないのよ」

完全にひすつっているゲーガール。彼女はチェスでマッドに連敗中なのである。

「あなたの集中力を欠く為にこんな恐怖のシチュエーションまで用

意したのに」

「その為？ゲームに勝つ為に俺をこれに乗せた訳？」

ゲーガールの言葉に怒るといふより呆れるマッド。

二人が乗っていた列車の名前はヘルチキントレイン、多くの者に略されヘチトレと呼ばれているそれは、原理をマッドは知らないが、持ち主であるゲーガールが乗せたいと思った者しか乗れず、定期的には止まるのだが、その時に乗っていたゲーガール以外の者は死ぬまで出れなくなるという恐ろしい乗り物なのである。

「じゃあ俺は帰る」

まだぶつぶつ言っているゲーガールにそう言い残し、列車の窓から飛び降りるマッド。

列車は時速三百キロほどで走っていたので、普通飛び降りるのは危ないが、マッドにとって特に何でもなかった。

マッドは少し傾向は変わっているが世間一般でいう所のいわゆる超能力者なのであるが、それは飛び降りて平気な事とは関係がない。それは単に彼の身体能力がずば抜けているというだけの事である。

「うん」

相変わらず意味がわからない、確かに飛び降りた景色はどこか森のような場所だったはずであるが、彼が上手い具合に足をついたのはカモミールフレイバー町内に八つあるステーションハウスの一つである。その名前も当然のように命名者はシュルである。

不思議な町、特殊な人達、そしてこれはそんな世界を愛し、戦い、騙し合い、運命をねじ曲げていく物語。

2 プロローグ？（後書き）

マッドはチエスがめっちゃ強かった友達がモデルです（僕が弱かっただけというのが真実）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9114r/>

カラーシーズン

2011年10月12日11時57分発行